

博士論文（要約）

日本占領期上海文壇再考
—中華日報社と中国文化人—

山口 早苗

要約

本研究は、日本の占領地政権であった汪精衛政権／南京国民政府の機関紙『中華日報』を材料とし、中華日報社に集い、これまで「対日協力者」「漢奸」として否定的評価を受けてきた中国文化人の文学活動・思想の再検討を通じて、占領地上海の文壇状況を実証的に捉え直すものである。これまで、当該時期の文壇については、文藝雑誌の分析から、左翼文学者や大衆文学者などの各文学グループの動向を明らかにする研究が主流であった。これに対して、本研究では当該時期の新聞である『中華日報』を利用することで、汪政権に近い位置にいた文化人たちの活動の一端を明らかにする。これにより、占領期上海文壇の全体状況を立体的に描き出そうとすることが、本研究の主な目的である。

1、問題意識の所在

本研究は汪精衛政権のもとで活動した文化人を扱うが、そもそも日本占領下の「対日協力者」をめぐるのは、中国本土であれ中国国民党統治下の台湾であれ、戦後になって「漢奸裁判」などを通して厳罰に処せられ、政治的烙印を押されたことは周知の通りである。政治的・社会的な圧力によって、彼らの活動は一種の「売国奴」たる「漢奸」として、「愛国主義」的な立場から断罪されてきた。このため、文学研究の領域においても、こうした人々の活動はそもそも研究対象から外され、或いは彼ら／彼女らの行為を否定的に論じることが学術界、一般社会を問わず支配的な傾向となった。

しかし、こうした中国国内の政治優先的な見方に対して、欧米では歴史研究の分野で、「対日協力者」の複雑な心理や内的葛藤に注目し、彼ら／彼女らを当時の文脈の中で理解することの重要性が早くから指摘されていた。中でも代表的とされるジョン・ボイルの研究は、汪精衛自身は「反逆者」でも「英雄」でもないという観点から、その「協力」行為を当時の歴史的状况の中で具体的に検証するものであった¹。

こうした主に歴史研究の立場から占領地政権を論じた研究が、本研究のように当該時期の「対日協力」に投じたとされる文化人を対象とした研究にも、多くの示唆を与えてくれる。なぜなら、当該時期の文化人達の動きも、必ずしも「抵抗」や「協力」に一義的に限定されるものではなく、多種多様で曖昧な側面が多くみられるためである。そのため、本研究ではこうした歴史研究の成果を参照し、「対日協力」を行ったとされる文化人の活動を時代状況

¹ John Hunter Boyle, *China and Japan at War, 1937-1945: The Politics of Collaboration*, Stanford, Calif., Stanford University Press, 1972. (中国語版は陳体芳訳『中日戦争時期的通敵内幕：1937—1945』北京：商務印書館、1978年)。

に即してより多面的に捉えることで、彼らの実像を明らかにすることを目指す。

2、本研究の位置付け

日本占領下の上海文壇に関する研究は、特に近年になり、豊富な蓄積が見られる。こうした研究から、上海文壇の内容が徐々に明らかになっているのは間違いない。しかし、それらの研究によって上海文壇の全体像は明らかになったと言えるだろうか。これに対して、筆者は次の点でさらなる検討が必要だと考える。

まず指摘すべきは、文壇状況を考察する際に、文藝雑誌と一部の総合誌以外の媒体への検討がなされていない点である。この傾向は特に中国大陸の研究で顕著である。もちろん、筆者も、文藝雑誌は当該時期の文学者の活動を追う上で重要な資料であると考え。しかし、こうした文藝雑誌のみの分析から、当該時期の文壇状況を十分に描くことは可能だろうか。例えば、日本占領期の文壇状況を振り返るうえでよく指摘されるのは、通俗文学の興隆である²。上海市民は占領による閉塞感や焦燥感を探偵小説や恋愛小説といった通俗的な読み物で紛らわせていた。このことは、当時最も読まれた文藝雑誌が『万象』という大衆誌であったことから明らかである。

だが、当時の上海の人々はこうした文藝雑誌のみを読んでいたわけではない。当時の証言にもあるように、文藝雑誌と同様に新聞に掲載された文学作品も多くの上海市民に歓迎されていたのである³。多くの市民にとって、新聞は雑誌以上に身近で手に取りやすい媒体であったろう。夏目漱石の例を引くまでもなく、近代日本で新聞小説が一つの流行をなし、多くの一般読者を引きつけていたのとそれは同断である。戦時下の上海文壇には、紙の供給問題（後述）があったにせよ、相対的な「安定」と「繁栄」の中で多様な発表媒体が存在したことは疑いない。それにもかかわらず、従来の研究では文藝雑誌以外の媒体が考察の対象となることはほぼ皆無であった。その背景には、当時の上海で刊行された新聞が日本軍部或いは日本の占領地政権である汪精衛政権と密接な関係にあり、後にはこうした政治的背景から言及が避けられてきた、という事情がある。

ここで、筆者が注目したいのは、占領下の上海で発行された新聞紙上で多様な文学活動が展開されていた点である⁴。当時上海の大型新聞には、文藝欄を含む多様な副刊が掲載されており、新聞文藝欄に集った作家たちはときには通俗文学作家と論争を行うこともあった。こうした状況は文藝雑誌のみの分析では、おそらくほとんど見えてこない。つまり、当時の

² 例えばこのことは、前掲孔慶東『超越雅俗：抗戦時期的通俗小説』、前掲劉軼『現代都市与日常生活的再発見：1942－1945年上海新市民小説研究』などで指摘される。

³ 莫敏「上海報紙的副刊」『上海記者』2号、1942年7月。

⁴ 新聞資料を用いたアプローチについては、日本では大橋らの共同研究に見られる通り、『大陸新報』という新聞資料から、日本文学者の活動が検討されている。

上海文壇の複雑な動向を考察するためには、新聞文藝欄などの他の媒体への目配りは必須なのである。

3、本研究の視角

本研究では汪精衛政権の機関紙であった『中華日報』を取り上げ、新聞文藝欄に集った文化人たちの創作活動や思想営為を明らかにする。付録の記事目録が示すように、筆者の調査によれば、同紙の文藝欄には当時の上海で知名度の高い作家が多く参加しており、彼らは積極的に文藝欄に寄稿した。彼らの活動が上海文壇の一角を形作っていたのは間違いあるまい。さらに言えば、占領地の状況を把握する上で、汪政権の機関紙である『中華日報』の存在を無視することはできないことは明らかである。中華日報社に参加し、汪政権に近い距離にいた文化人たちは、当時どのような編集方針で文藝欄の紙面を構成し、また作家たちはどのような考えで文筆活動を行っていたのか。本研究は『中華日報』という媒体を手がかりに、占領下の上海文壇を担った文化人達によるさまざまな文藝活動を検討することで、当時の文壇状況をより立体的・総合的に把握することを目指す。

本研究が行う考察は具体的には以下の二つである。第一に、『中華日報』文藝欄を代表する「華風」(1939～1942年)、「中華副刊」(1942～1945年)という2種の刊行物を取り上げ、その特徴を明らかにする。第二に、中華日報社に集った文学者のうち、中心的な働きを行った陶亢徳、楊之華という2人の編集者を取り上げ、戦時下におけるその活動を追うとともに、彼らの文学観や思想を明らかにする。

本論文は五年以内に出版を予定しているため、序章・第一章・第二章・第三章・第四章・終章及び図表は省略した。